Osaka University Knowledge Archive

Title	Adalbert Stifter の詩学 : 『晩夏』をめぐる「自然」の表象に関する文化史的考察
Author(s)	中野, 逸雄
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59391
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【8】

氏　　名	中　野　逸　雄（なか の いつ お）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２４９１８　号
学位授与年月日	平成23年９月20日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	Adalbert Stifter の詩学 —『晩夏』をめぐる「自然」の表象に関する文化史的考察 —
論文審査委員	（主査） 教　授　上倉　庸敬 （副査） 教　授　藤田　治彦　　准教授　三宅　祥雄　　教　授　三谷　研爾

論文内容の要旨

本論文の目的は、19世紀オーストリアの文学者アーダルベルト・シュティフター（Adalbert Stifter, 1805-1868）の代表作『晩夏』（Der Nachsommer, 1857）における「自然」表象を文化史研究という観点から分析し、シュティフターが抱いていた Poetik （詩学ないし制作理論）の構造を明らかにすることにある。

Ａ４判で、目次3頁、本文87頁（1頁38行、1行44文字。本文は400字詰め原稿用紙に換算して、およそ360枚）、註が20頁、参考文献目録も20頁、全130頁から成る。

はじめに論文の目的を明示、第1章《20世紀における『晩夏』受容史とシュティフター》では、20世紀のシュティフター受容を検証し、その批判と擁護を再構成して、現代にあって、どのようなシュティフターが問題にされるべきかを問う。それは、物語における劇的な行為の模倣よりも、人間をとりまく自然および文化という、文化環境の再現へ、創作の重点を転換したシュティフターである。

第2章《『石さまざま』の「序文」へむけて》と第3章《「おだやかな法則」再考》では、従来シュティフター創作理論の中心に位置づけられてきた短編集『石さまざま』（Bunte Steine,1853）「序文」を綿密に読み直す。そこで率直に表明されている作家の自然観は、世界の自然 Natur と人間の本性 Natur に連続性を見出している。そこからシュティフター独自の詩学が導き出された。それは、自然をそのままに描写して作品を創造すれば、登場人物と作家自身の気高い

道徳性が保証されるだろうという、他に類を見ない Poetik である。

第4章《シュティフターの美学講義草案ー『晩夏』を可能とした「情熱批判」とシュティフターの美学》では、これまでほとんど研究されて来なかった『ウィーン大学あて美学講義草案』（1847年）を緻密に検討する。美は道徳と不可分に結びついており、気高い道徳は「情熱」を否定して達成される。作品は美と道徳をともに実現しなければならないから、その Poetik の根本には、「情熱」に対する鋭敏な「批判」が措定されている。シュティフターの美学は、『晩夏』を生んだ芸術観、『晩夏』の登場人物と物語が内包する芸術観の本質を形づくっている。

第5章《主題分析ー『晩夏』における「愛」の様相ー》と第6章《『晩夏』における理念と形象》では、『晩夏』の中心テーマである「愛」のさまざまな描かれ方に即して、「情熱批判」のあり方を探りあてた上で、主人公の成長がもっとも急速に実現される場面いくつかに焦点を絞り、その自然と芸術の経験がどのような歴史にもとづくかという、文化史的考察をほどこす。作家の Poetik によって要請された作品構造は、『晩夏』という小説の、非・小説要素を生み出さざるを得なかった。『晩夏』とは何か。1830年代を舞台に、これまでの歴史をふりかえり、そこに見られる、作家にとって肝心なものだけを選択し、保存した小説である。美に関する作家の博物学を体系化した小説である。その解明は今後、第6章で試みられたような文化史的考察によって、はじめて明らかになるであろう。

論文審査の結果の要旨

シュティフターの Poetik についても『晩夏』に対しても、分析は明晰、その方法も結論も、現代の問題意識にとって興味深い。

まずは、『石さまざま』「序文」再読によって、シュティフターの自然観の体系が、制作理論を含む形で、他の理論的な著作との関連を見きわめられつつ、正確にまた新鮮に再構築された点を、特筆したい。つぎに、ウィーン大学に提出された美学講義草案は、従来まったく検討されて来なかったテキストである。その、メモにすぎない単語の羅列から、カントの影響下にある19世紀ドイツ語系美学の受容例を見つけ出す手際は、評価されなければならぬ。

シュティフターの Poetik が、『晩夏』成立史という観点から、集約され綜合されていること自体、巧みな切り口と認められよう。文学表象から透けて見える「自然」と「美」をめぐる議論が、『晩夏』に内在する芸術性つまり創造性と緊密な関係をもつことが明らかになった結果、シュティフターに独特な、理論から作品へ至る結実のプロセスもまた明らかにされたのである。

シュティフター詩学の、自然と美と芸術について思索し、認識と創造と道徳の一体化を目指す志向の背景には、ドイツ観念論とヴァイマール古典主義に代表される18世紀以降のドイツ語圏美学の伝統が横たわっていた。そのことを本論文の全体は明確に示している。したがって、『晩夏』ひいてはシュティフターの Poetik 解明には、それが孕む文化史の課題を引き受けねばならぬという、その主張が本論文の独創の最たるものであろう。

だからこそ、留保しなければならぬ問題点も多いと、いわなければなるまい。本論文にいう文化史研究とは何か。精神史研究とどこが違うか。明確な検討はなされていない。「Natur」、「自然学」、作品に「外在・内在する」など、主要な術語ないし概念に関し、一貫した定義が与えられていない。また、そうしたものに関する訳語も十分に練られてはいない。「自然」表象の説明も美術史のコンテクストから考えた場合、精密さを欠いている。小説における「描写」が、現代の文学理論にあって、どのような意義をもつか、目配りが利いていない。美学の理論について論者の視野が狭すぎるなどなど、乗り越えるべき課題は山積している。

それでもシュティフターをとおして、広く19世紀ドイツ語圏文化史のなかで諸芸術の交流を把えようとする本論文は、今後の文学研究における新たな展開を期待させる。この萌芽は高く評価することができる。

よって本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。